

エントリー学校名：茨城県立高萩清松高等学校

活動名： (主タイトル) 若手教員支援プロジェクト
 (副タイトル) チーム教員としての意識を育む取組

解決すべき課題： 本校は毎年 3 名程度新採が配置される総合学科の高校である。令和元年度は全体の約 3 割を占める 20 代の教員が、第 1 担任ながら校務分掌においても責任ある仕事を担わざるを得ない状況であった。そして、若手教員の多くは 1 人で問題を抱え込み、解決しようとしていた。そのせいか、精神的疲労を訴える教員が出てきた。しかし、学校で生じる諸問題を解決するには教員同士の連携が重要である。そこで「若手教員の、諸問題を連携して解決しようとする意識の欠如」を本校の課題と考えた。

目標・方針： ①若手教員を対象に、意見を交換し合う機会を定期的に設けることで、学校の諸問題を「1 人でではなくチームとして解決していく意識と姿勢」を育む。②管理職による授業支援とアドバイスを行うことで、授業に対する自信とやりがいを持たせる。③管理職や先輩教員が面談を行うことで、心の安定を図る。

活動内容： 令和元年 11 月の定例職員会議において「若手教員支援プロジェクト」の実施が承認され、実施の運びとなった。対象は初任者、2・3 年目ならびに教職経験 3 年以内の常勤講師で合計 11 名。内容は大きく 3 つ、①意見交換会 (対象者全員) 【写真 1・2】②授業支援 (希望者) ③個別面談 (希望者) というものである。特に①意見交換会は R1 では月 2 回、平日の放課後に 1 時間ほど開催した。事前アンケートの結果をもとに教頭がテーマを決め、ディスカッションする中で課題を共有したり、解決策を協働して探ったりした。先輩の教員が毎回数名参加し、助言した。【グラフ 1・表 1】②の授業支援では落ち着いたクラスに教頭が TT の形で関わった。③は②や①に関連して、希望者に対して教頭や先輩の教員による個別面談を随時行った。令和 2 年度 9 月現在、本プロジェクトは継続実施中である。

活動の成果： ①の意見交換会では、校務多忙を理由に 1 回目の参加率は 45%だったが、3 月最後の 7 回目の時は 70%に上がり、各回とも前向きな意見が得られた。【図 1】毎回先輩教員が「助言者」として参加し、具体的なアドバイスを行ったことで、チームとして取り組むことの重要性を認識したようだった。年度末の事後アンケートには「来年も色々な先輩教員を助言者に呼んで欲しい。」とあり、有益な時間を得られたようだった。若手同士、先輩後輩同士、定期的に 1 つのテーマで語り合い、同じ時間を共有したことで連携意識が生じ、職員室の雰囲気は少し明るくなったように思う。授業支援においては管理職の支えがあることに安心し、ゆとりを持って生徒対応に臨むことが出来たとのことだった。令和 2 年度では意見交換会の助言者に教育の専門家を招くなど、質的向上を図るべく、改善策を立てているところである。(新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、意見交換会は月 1 回の実施とした。)【図 2】

アピールポイント (アイデアや工夫)：

- ①の意見交換会において、お茶やお菓子を用意し、「カフェミーティング」という形態にすることで、発言しやすい和やかな雰囲気を作ったこと。
- ①において、2 人の教頭がそれぞれ司会と書記を務め、参加者の負担を減らしたこと。
- ①において、年の近い先輩教員を「助言者」とし、討論の中身を深めさせたこと。
- ②の授業支援において、管理職と生徒指導相談員が連携し、より効果的な支援を図ったこと。

写真 1 意見交換会の様子 その 1



写真 2 意見交換会の様子 その 2



グラフ 1 事前アンケートその 1

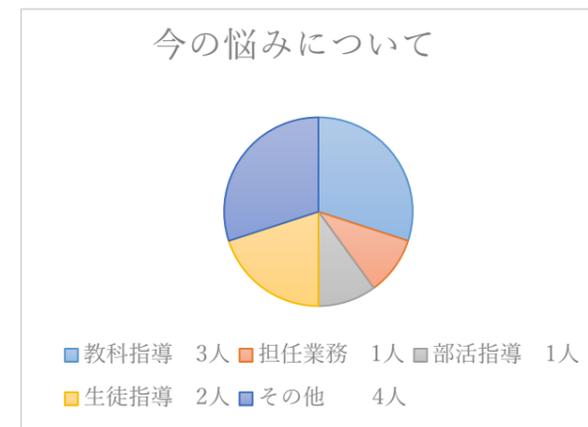


図 1 意見交換会のテーマと実施結果

＜R1 意見交換会のテーマ＞

- 1 回目「魅力ある授業がしたい！」
- 2「心に響く言葉がけとは？」
- 3「こんな場合どうする？」
- 4「身体と心の関係とは？」
- 5「仕事の効率性を上げたい！」
- 6「担任の醍醐味とは？」
- 7「コンプライアンスは大事！」

＜実施結果 (先生方の意見)＞

- 1 回目「体験的な学習の導入を！」
- 2「まずしっかりと聞くことが大事！」
- 3「一人で抱え込まない！」
- 4「雑談で素を出す！」
- 5「まず身の周りの整理整頓をせよ！」
- 6「生徒の成長に関われる喜び！」
- 7「社会人としての自覚を持つ！」

表 1 事前アンケートその 2

＜悩みの具体 / 扱って欲しいテーマ＞

- ・生徒がつまらなそうにしていることが多い。
- ・無気力気味の生徒をどうやる気にさせるか。
- ・突発的な事故があったときの対応について。
- ・授業における個に応じた指導方法を知りたい。
- ・時間が足りない。
- ・仕事の分担化について。

図 2 本プロジェクトの改善策 (R2 以降)

＜若手教員のすべきこと＞

- ・3 年をひとつのサイクルとして設定し、自己の記録として保存する。

＜管理職のすべきこと＞

- ・若手の意見交換会を、時に教員の対象を広げ、拡大研修会にすることで、学校全体のチーム力強化を図る。
- ・意見交換会の助言者に教育の専門家を招くなどして、さらに充実させる。
- ・管理職が変わってもこのプロジェクトが継続するよう、マニュアルを作成し、引き継ぐ。